

第1章 計画策定の趣旨、基本的事項



第1章 計画策定の趣旨、基本的事項

1-1 計画策定の趣旨

1-1-1 計画策定の経緯

小金井市は、小金井市環境基本条例に基づいて「小金井市環境基本計画」（平成17年（2005年）10月）を策定し、さらに環境保全を効率的に進めるために短期的・中期的に取り組むべき実施事項、優先して対応すべき事項を「小金井市環境保全実施計画（平成20年（2008年）9月）」で明らかにしました。この中で市域の地球温暖化防止を推進する地球温暖化対策地域推進計画を平成21年度（2009年度）中に策定すると掲げました。

一方、低炭素社会を実現するために、市町村などの地方自治体には【京都議定書目標達成計画（平成20年（2008年）3月改定）】で定める国内の目標達成に貢献することが求められています[※]。これらの背景を踏まえて、小金井市では自主的、積極的取り組みとして、「小金井市地球温暖化対策地域推進計画」（以下、本計画とする）を策定することとします。

※ 「地球温暖化対策の推進に関する法律」第20条第2項で規定する「地球温暖化対策地方公共団体実行計画（区域施策編）」の策定の努力義務

1-1-2 計画策定の目的

小金井市の、市民・事業者・教育研究機関・市が一体となって、地域をあげて地球温暖化防止に取り組むために、温室効果ガスの排出を抑制するための施策や対策を総合的に推進していくことを目的として本計画を策定します。

1-1-3 計画の基本方針

本計画では、「小金井市環境基本計画」（平成17年（2005年）10月策定）に基づき、基本計画に掲げた基本目標の一つである「地域から地球環境を保全する」の「地球温暖化の防止」に関する理念を基本方針とします。

「地域から地球環境を保全する」

地域からできる地球温暖化防止について、具体的な目標をたてて実行します。地球規模の環境の悪化につながる行動を見直し、また地球市民として積極的に保全行動に参加します。

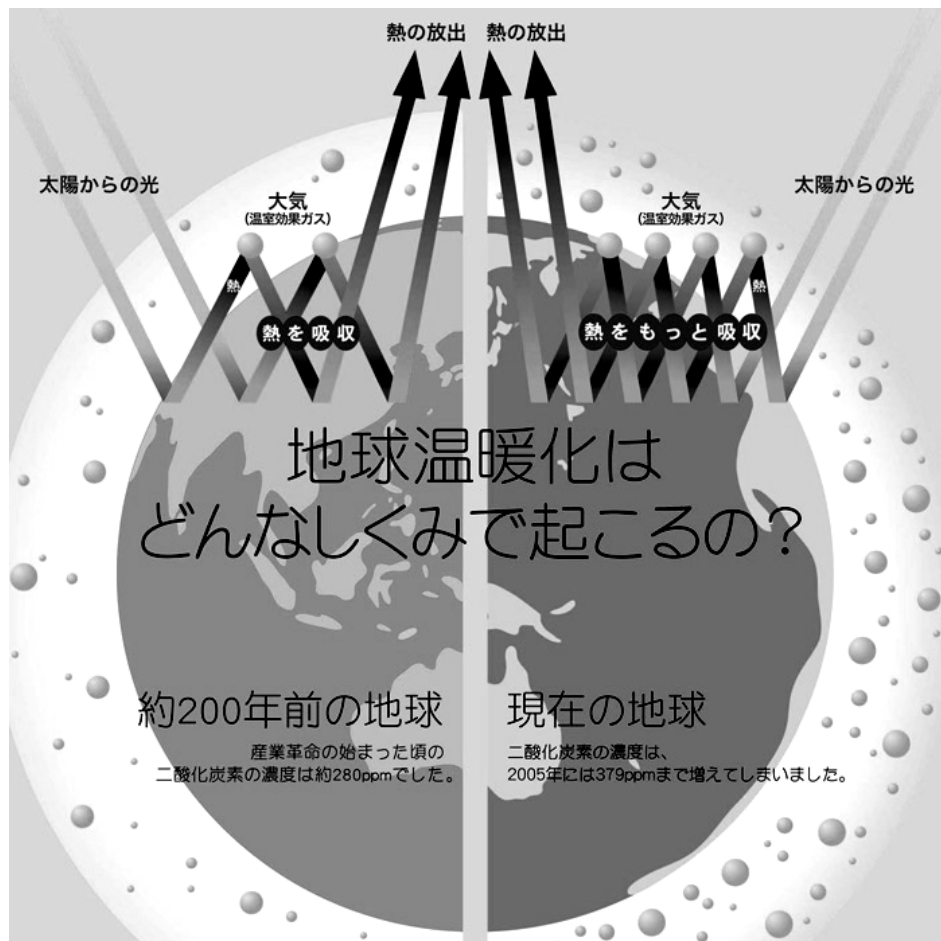
1-1-4 市既存計画との関係

小金井市における既存の関連計画と本計画との関係を、次頁の図に示します。

現行の「小金井市地球温暖化対策実行計画（市役所版）」は、計画最終年度（平成 22 年度（2010 年度））に見直しを行い、平成 23 年度（2011 年度）以降に、「小金井市地球温暖化対策地域推進計画」内に統合することを検討します。

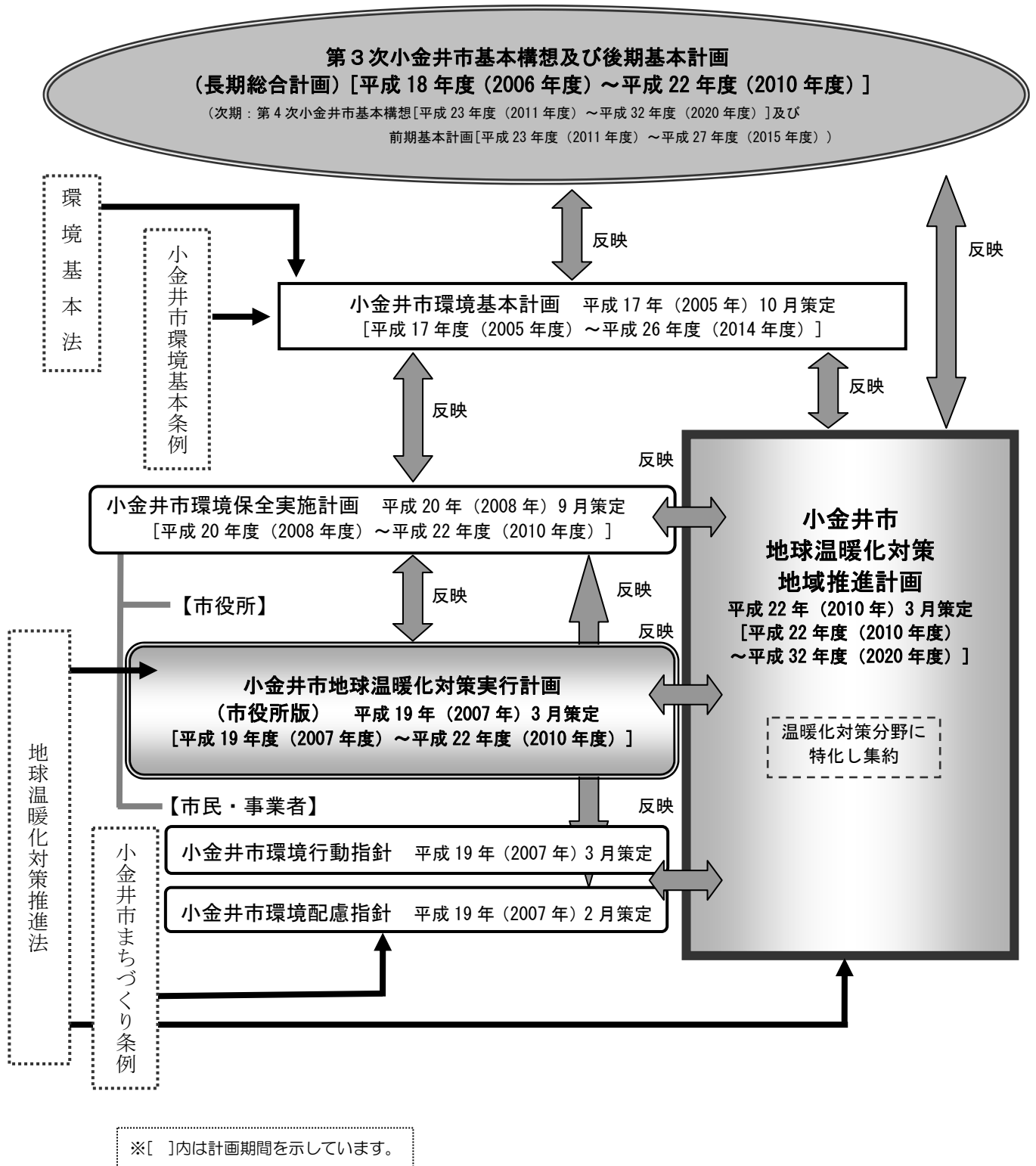
本計画の具体的な事業の予算付けを含めて策定する実施計画については、「小金井市環境保全実施計画」の最終年度（平成 22 年度（2010 年度））に、本計画関連の事業を追加するための見直しを行い、新たな「小金井市環境保全実施計画」を策定することとします。

■ 温暖化のしくみ



図出典：全国地球温暖化防止活動推進センターホームページ

◆ 「小金井市地球温暖化対策地域推進計画」と市の既存関連計画の関係



1-2 計画の基本的事項

1-2-1 対象とする主体

本計画が対象とする主体は市民、事業者、教育研究機関、市とし、市民の生活、事業者の事業活動、市の事務事業に伴って、市域内で発生する温室効果ガスを削減対象とします。

1-2-2 対象とする地域

本計画の対象地域は、市全域とします。

1-2-3 対象とする温室効果ガス

本計画が対象とする温室効果ガスは、二酸化炭素(CO₂)、メタン(CH₄)、一酸化二窒素(N₂O)、ハイドロフルオロカーボン類(HFCs)、パーフルオロカーボン類(PFCs)、六ふっ化硫黄(SF₆)の6物質とします(ただし、パーフルオロカーボン類は市内からの排出はほとんどないと見なされます)。

1-2-4 基準年度

本計画の短期目標および中期目標の基準年度は、温室効果ガス排出量の確定値が本計画策定時点(平成21年度(2009年度))で把握可能な直近の年度である平成18年度(2006年度)とします。

1-2-5 計画期間と進捗確認

本計画の第一次計画期間の最終年度は「第4次小金井市基本構想及び前期基本計画」に合わせ、平成32年度(2020年度)とします。

進捗確認のための中間のチェック年度は、現行の「小金井市環境基本計画」の最終年度に合わせて、平成26年度(2014年度)とします。また、本計画の最終年度の平成32年度(2020年度)には計画全体の進捗度合いの評価と改訂等の見直しを行うこととします。

ただし、小金井市の地域環境、地球環境、国内外の経済社会動向の著しい変化等が起きた際には、前述の年度に限らず随時、計画の点検、見直しを検討することとします。



1-2-6 計画見直しに当たっての主なポイント

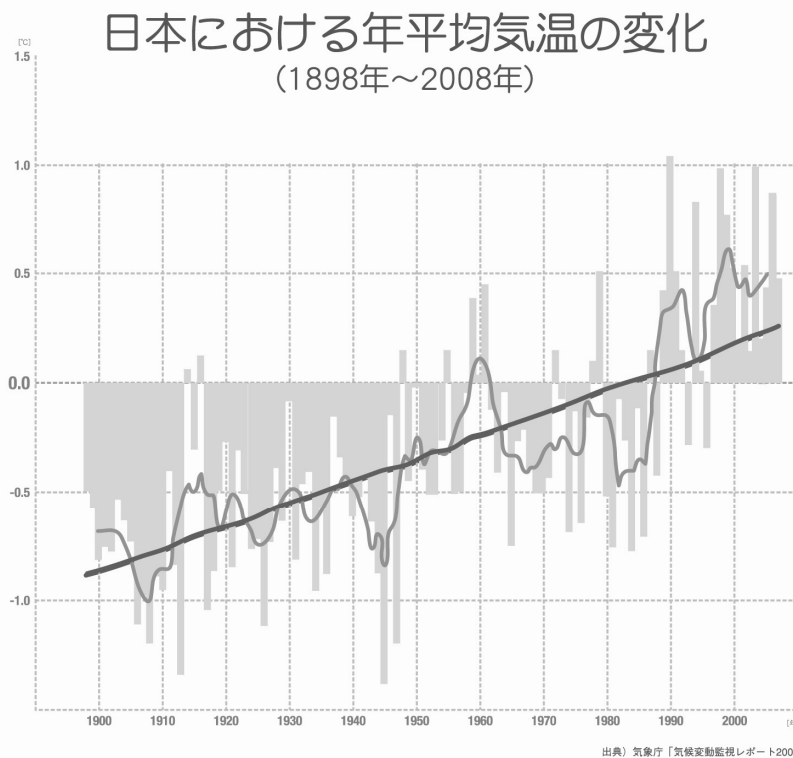
本計画の見直しに際しては、特に以下の事項を主なポイントとします。

- ・ 既存もしくは今後策定される小金井市の各種計画との調整
- ・ 温室効果ガス削減ポテンシャル試算の精査（見直し時点における最新の技術や社会動向の反映）
- ・ 政府の中期目標、新法制定、税制改正（温暖化対策税等）、関連施策
- ・ 都や近隣自治体の関連計画・施策

■ 日本はどれくらい温かくなった？

下図は日本における年平均気温の経年変化（1898～2008年）を表しています。基準値（0.0℃）は、1971～2000年の30年間の気温の平均値です。

日本では1990年代に入ってから、年平均気温が基準値よりも高い傾向にあります。



- ☆ 棒グラフは、国内17地点（網走、根室、寿都、山形、石巻、伏木、長野、水戸、飯田、銚子、境、浜田、彦根、多度津、宮崎、名瀬、石垣島）での年平均気温の平年値（平年値との差）を平均したもの
- ☆ 曲線は、その年と前後2年を含めた5年間について平年値との平均をとった5年移動平均
- ☆ 直線は平年値の長期的傾向を直線として表示したもの

図出典：全国地球温暖化防止活動推進センターホームページ

■ 温暖化になると何が困るの？

現在の状態のまま温暖化が進むと、2100年までに平均気温が約4.0℃（2.4～6.4℃）上昇すると予測されています。

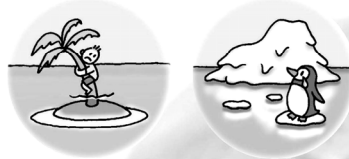
平均気温の上昇は①海面上昇、②動植物の絶滅リスクの増加、③マラリア感染地域の増加、④異常気象の増加、⑤食料不足、⑥熱帯低気圧の強大化等の影響をもたらすと考えられています。

世界における地球温暖化の脅威

IPCCが第4次評価報告書で発表したように、このまま温暖化が進み、2100年に地球の平均気温が化石エネルギーを重視しつつ高い経済成長を実現する社会では約4.0℃（2.4～6.4℃）上昇すると予測されていますが、地球はどうなるのでしょうか？

海面上昇

- ① 海水の熱膨張や氷河が融けて、海面が最大59センチ上昇します。南極やグリーンランドの氷床が融けるとさらに海面が上昇します。



動植物の絶滅リスクの増加

- ② 世界平均気温が産業革命前より1.5～2.5℃以上高くなると、調査の対象となった動植物種の約20～30%で絶滅リスクが増加する可能性が高いと予測されています。



マラリア感染地域も増加

- ③ 世界中で猛威をふるっているマラリアは、温暖化が進むとその感染リスクの高い地域が広がります。



異常気象の増加

- ④ 極端な高温、熱波、大雨の頻度が増加し、熱帯サイクロンが猛威を振るようになります。高緯度地域では降水量が増加する可能性が非常に高まり、ほとんどの亜熱帯陸域においては減少する可能性があります。



食料不足

- ⑤ 世界全体でみると、地域の平均気温が3℃を超えて上昇すると、潜在的食料生産量は低下すると予測されています。



熱帯低気圧の強大化

- ⑥ 温暖化により、強い熱帯低気圧は今後も増加することが予測されており、その結果、激しい風雨により沿岸域での被害が増加する可能性があります。



出典：環境省「IPCC第4次評価報告書—統合報告書概要」
編纂者「STOP THE 温暖化 2008」

全国地球温暖化防止活動推進センター
<http://www.jccca.org>

JCCCA
Japan Center for Climate Change Actions

■ 温室効果ガスってなに？

温室効果ガスの種類、地球温暖化係数、性質、用途・排出源についてまとめたものは以下のとおりです。

地球温暖化係数とは、温室効果ガスごとに地球温暖化をもたらす程度について、二酸化炭素を1としたときの比を表したものです。

温室効果ガスの特徴

温室効果ガス	地球温暖化係数*	性質	用途・排出源	
CO₂ 二酸化炭素	1	代表的な温室効果ガス。	化石燃料の燃焼など。	
CH₄ メタン	23	天然ガスの主成分で、常温で気体。よく燃える。	稲作、家畜の腸内発酵、廃棄物の埋め立てなど。	
N₂O 一酸化二窒素	296	数ある窒素酸化物の中で最も安定した物質。他の窒素酸化物（例えば二酸化窒素）などのような害はない。	燃料の燃焼、工業プロセスなど。	
オゾン層を破壊するフロン類	CFC HCFC 類	数千～数万	塩素などを含むオゾン層破壊物質で、同時に強力な温室効果ガス。モントリオール議定書で生産や消費を規制。	スプレー、エアコンや冷蔵庫などの冷媒、半導体洗浄、建物の断熱材など。
オゾン層を破壊しないフロン類	HFC ハイドロフルオロカーボン類	数百～数万	塩素がなく、オゾン層を破壊しないフロン。強力な温室効果ガス。	スプレー、エアコンや冷蔵庫などの冷媒、化学物質の製造プロセス、建物の断熱材など。
	PFC パーフルオロカーボン類	数百～数万	炭素とフッ素だけからなるフロン。強力な温室効果ガス。	半導体の製造プロセスなど。
	SF₆ 六フッ化硫黄	22,200	硫黄とフッ素だけからなるフロンの仲間。強力な温室効果ガス。	電気の絶縁体など。

* 地球温暖化係数とは、温室効果ガスそれぞれの温室効果の程度を示す値です。ガスそれぞれの寿命の長さが異なることから、温室効果を見積もる期間の長さによってこの係数は変化します。ここの数値は、気候変動に関する政府間パネル（IPCC）第3次評価報告書の値（100年間で計算）になります。

図出典：全国地球温暖化防止活動推進センターホームページ